

局の厳しさを感じた。ドイツ敗戦後、Uボート数隻入港、呂五〇〇型と改めた。電気系統修理に乗艦したが、木製の甲板がなく魚雷管は日本艦に比べ細かったように思った。当時の乗組士官、戦後駐日武官のクルグ大佐が昭和六十二年十月来沢され、当時を思い出し語り合った。超々大型潜水艦エンジン四基、飛行機三機（晴嵐）搭載（伊四〇〇型）に、電気系統の学習のため横付けしたが、戦艦「大和」に横付けした駆潜艇のような感じに思った。いまでもフツと「ドンガメ」乗りのころを思い出すが、「急速潜航ベーント開け」「急速浮上メーンタンクブロー」、活気のある総員配置にいた行動号令。人港用意、前部ハッチ開け、何事にも「五分前」精神は風化なく、今も懐かしい教訓である。

清く正しく、実行第一の海軍の教えを語り伝えて、太陽の熱と光、味のある大気など自然の恵みに感謝し、若くして戦没された戦友の霊に黙祷をささげ、ご冥福をお祈り申し上げるとともに、余命を地域社会のお役に、社会福祉、民生の向上に、安心と平和のために尽くさせて頂く所存であります。

## 満州―南方作戦転戦記

熊本県 山本武行

### 動員令

満州第一部隊にも七月になり八十六飛行場大隊として、南方作戦参加の命が下された。数日間、初年兵もあわただしさが続き牡丹江を出発する。貨車に乗っての南下であり客車と違い割合に自由にできて身体は楽であった。私たちが満州に行く時と違い、行き交う列車には年若い召集兵らしい顔がみえ、我々の交替要員かと思つたと、可愛想な気がしてならなかった。船団を組むまでの間、門司市大里付近の民宿に宿泊。ほんの数カ月ぶりなのに畳が何と懐かしいことよ、多忙な初年兵にとってくつろげる数日であった。

### 輸送船団

瑞穂丸に乗船。船室は二段に仕切られぎゅうぎゅう詰め、息苦しい感じで真つすぐに立つこともできず、通路

以外は中腰で食事の準備や雑用をした。割り当てられた順番で、各部隊より初年兵が飯上げに炊飯所に集まった。熊本の歩兵部隊の中に同郷の召集兵の人を見つけ、町の様子をいろいろと話してもらった。航空廠に三年勤務していた私には懐かしく、その後数回、甲板で会っては思ひ出話を繰り返した。

私たちには航行のことなど全く分からず、トビウオの群れに出会ったりイルカが船と並行して走るのを眺めたり、山国育ちの私には物珍しいことばかりだった。後で聞いた話では敵潜水艦の出没で支那海の方へ迂回しながら、二十数日かけてバシー海峡にさしかかったとのことだった。完全武装の装具とともに晝一枚に四人、頭の上の仕切りに同数の兵隊がいた。上の方には通気孔より風が入るものの、下の方では蒸し風呂同然、パクパク息をしている水槽の金魚のようで、暇を見ては甲板にて新鮮な空気を胸いっぱい吸った。

#### 魔のバシー海峡

その日も夜明け前より甲板に出ており、だんだんと空も白み始め、一隻また一隻と姿を見せる船を見つめてい

た。その時、船尾の数ヶ先を泡が一条の線となり、物すごい早さで通り過ぎた。「ズズン」腹の底から揺るがすような大音響とともに、隣の船から火煙が上がった。

「魚雷だ」一瞬の出来事にただ啞然としてみるよりほかなかつた。「ドドン ドドン」船倉に積んだ爆薬等を誘発するように何回も爆発を繰り返した。黒煙と火柱の間から見える船は、航空母艦のようにノッペラボウで何もなかった。傾きかけた船からは多くの兵隊が落ちて行き「ボォツ、ボォツ」と物哀しい別れの汽笛を残しながら、真逆さまに海の藻屑と消えていった。

軍艦マーチとともに流された真珠湾攻撃のあの華々しい戦勝報道。だが戦局は反転、最早ここまで来たのか？陸上ならば避難も出来ように、敵の一人も倒せるものを、海上に投げ出された兵隊の中でどれだけの人が救出されるだろうか。暗たんたる気持ちであった。

お互いに無事を喜びながらマニラに着いた同郷の歩兵部隊は、レイテ作戦のため船に残った。初年兵である私には、彼と話す自由もなく、どこかで見つめていてくれるであろう彼に、手を振りながら別れた。

結局、船内での語りが彼との最後の別れとなった。

## 空襲

十月に入って戦況は厳しくなり、特攻隊要員をクラーク飛行場へ送ったり、B 29の爆撃を受けながら衛兵勤務、対空監視所勤務と下番なしの忙しい日々であった。

明け方、南方独持の刺すような強い光が山の上に頭を出した。その太陽を背に「キーン」という金属性の爆音とともに超低空で艦載機が進入した。余りの見事さに驚いたが、ぼう然としている時ではない。我々を呑んでかかっている敵機は、天蓋を開けて髪を振り乱しながら容赦なく襲いかかった。長い長い死闘が続き、中隊本部前に置かれた数人の死体には蟻が這っていた。

## 派遣隊

軍隊生活も一年を過ぎ上等兵に進級していた。見習士官を長とする爆弾燃料倉庫の守備に派遣された。勤務以外は自分の自由な時間が持て、隊長とよく馬で遠乗りをし、見回りも兼ねて周辺を回った。本隊より離れた気安さもあって、入隊以来初めて味わう気楽な日々であった。そんなある日、敵観測機が何回となく飛び回った。数

時間後に「戦車の轟音が派遣隊に近づく」の報が入った。周辺の道路には、戦車の進路をさえぎるため、椰子の大木を切り倒してあったが何の役にも立たず、空耳かキヤタピラの音がする。緊張の時間が過ぎて行き、倉庫には既にガソリンが撒かれ、ボロ布を先端に巻いた点火用の棒が用意され、指揮官の合図で一斉に投げ込まれた。ニッパ葦きの庇を火が矢のように走る。「ドドン」火柱とともに地を揺るがす大音響とドラム缶の破裂音、火焰放射器さながらに飛び交う火、誘発爆発するさまを見ながら複雑な心境であった。

## 斬込隊

本隊のあるリパ市焼却を合図に、各派遣隊は引き揚げの命令により小隊に帰着。くつろぐ暇もなく、夕刻より斬込隊として全員が集められ、私たちが斥候を命ぜられた。全身を耳にしながら任務を果たし部隊本部に帰った。報告を終えたのは明け方近くであった。各自本部近くの壕（タコツボ）に入った。三日三晩の疲れがどっと出て、いつの間にか眠ってしまった。

「ザァッ」頭から土砂がかり、びっくりして目を覚

ます。戦車砲の炸裂でトタンが吹き飛ばされた。何時間寝たのだろうか。陽は高々とあがっていた。隊列を敷いた戦車の後には敵兵がみえる。後方を見ると、垣根越しに友軍の姿がちらつく。壕を飛び出し垣根を遮蔽物にして、戦友の後を追う。

「シュツ シュツ」火を吹きながら曳光弾は文字通り雨あられ、ようやくにして防空壕へ飛び込み十四、五人の兵員と合流することができた。集中砲火を浴びながら「このまま突っ込もう」「できるかぎり避難し陣容を立て直そう」など話合いが下士官、古参兵の間で交わされた。「重機関銃の装備を持っているので一足先に」との決定により二人、三人と壕を飛び出した。敵は待ってましたとばかりに一斉射撃である。一人また一人と倒されていくのを見ながら、死に対する恐怖は少しも感じなかった。

#### 転進作戦

敗残の悲哀をかみしめながら命からがらの掃投であった。日を追うごとに砲撃は激しくなり、一日で山の形が変わるほどに大量の弾丸が打ち込まれる中、転進作戦と

いう、私たちの逃避行が始まった。

ゲリラの襲撃にあい、道なきジャングルや、山蛭に悩まされ、ひとたびスコールが来れば今まで歩いた窪地が濁流の川となる。全員に疲労の色が濃くなる。悪性の赤痢にかかり血便で絶えず軍袴を濡らしながら、精神力だけで追ってくる者、マリアアの高熱で毎日苦しむ人、負傷が化膿して蛆虫がわく者。そして次第に人員もバラバラになっていった。

### 従軍中の体験手記

兵庫県 加納 種 一

はじめに

私は大正十五年現役兵として輜重兵大隊に入隊。二年兵の後期より師団経理部において経理学を学び、満期除隊後、平時進級により主計伍長に任命される。体験記は普通兵科と大分異なります。海難の三回はアメリカ軍の魚雷攻撃を受けたもので、三回とも乗船は沈没した体験